

414
A 302



漢書再拜之書は道書堂主領

伊藤大隈重信公侯下之里竟不肖其父應之再宿有

我之以て車紀の時子生小幸有りて昭昭昭代の徳を湛

志田沼子六年以て在野を出る浪花に遊む口亦

年知以て轉て車紀上之故法學士岡山重吉氏に

交りたせられたるは法學の學を東京法學院に修む昭

井五より在野士とありて子生最君業を補助し其年

冬明りて歸り南斗五年に於て牛車山長事長其の

間學士の能海法以て幸ひ市島山及西山の法氏と接

志みたる由想ふ心る極ふり法氏、聲を新法より其を好

有る之か為め古人の書を法學又其書の論を以て其女

は其書のものを其書の心ありて唯めありて其年東肥の時

文書堂印

理義的進歩の光燭未を熾かなるに徒らに
的修守の故中永く塞き利 百里晴里の唐系に後
大燭の融く光被る可くさるる地に立るる加ゆる院
陸中奥改進黨は政軍重なる屯田策の修守九州
の唐系殊に我軍紀を看る事於漢人の白奴に
於ける如く強んて之を長城邊塞の外に棄
きて顧みけり此の如し是を成りて多少宇内の大勢
形と文昭の趨趨と観る所ある士あるり
阿るるも心も而もその中央との連絡を欠き
いふが孤あるるは其に於る氣を留め力感是り
た大なる為るる能くさるる不肖常より其の之を慨
す然れども才力未だたは能く御座候間す

よ由るは子韜晦隱君以て今日迄の但左取と一兵
の精神を盡しては 自ら一定不變のものありては
嘗て改進黨の大主義戦伐志とある事あり又嘗て
天下を對するは白旗戦表を失せしものあり也
然れども不肖 敢て閣下の仲人たるが故に徒らに之を
崇拜するものあり又敢て敢て之を被辭せしもの
ありて時着顧利進の常戦合とんと戦するもの
ありき 誠して改進黨の大主義戦の再進して且つ能く
之を以て修守の人の救護に勉力して敢て投まはるる仲
人こと伝ふは仲人よりして敢て修守の人の救護に
進んてせんことば者なりと已まらるるは以て不肖は
大政治家の修守は實に一國を以て公佐抱んとす

不肖亦帝國國民なりとは閣下の所命に對て公儀の權利
を主張し閣下は乃ち帝國國民人之這般の請求に對
て一顧の力に依りて之を遂げざるの公儀の義務ありと
云はざるは誠ならず

夫れ憲政政治の代議制度の世に於ては後居閣下の
大才手統帥以て之を遂げざるも而も輿論及多數の
力は利用するにありんば乃ち為政の様相の急轉
快滑を記すに足らざる而も輿論及多數の力は
制せんとなすは政黨多數の力に利用するは外あり
下も苟も之を及せず則ち内政外交共に其目的
を成就し可きにあらずんば試みは既性の歴史に徴せ
んは閣下嘗て其言を大體以て早午の故を鼓し以

文部省御用

て條約改正の局を為す而も其事業志未だ成らず及び
す一々功業未だ一々雨後霽外の燦爛たるを滅せざる
も亦或るは孫儀に於て遠東を益附大過失の條約
以て見事なるを得過夫の陸軍擴張と云ふ本條約に
は抑何れもや善し時運の因もつゝ多少は之を成らん
はれども其結果を立てて閣下の事業を輔護せし政
廷況も亦乃ち日主我の士の之外に官房ありて之を孫
儀が候補せし自由派を以て其結果を孫儀の眞意を
物に於て之を成らしめしは敢て由を以てはありしと
孫儀自ら其より由を意なきに因りて其結果を孫儀を
任有るにありしと成れども彼の順慶的由を以
て之を無節操より由を意し湖の爲めは姑く媚を以て之

と替回せし所以のものに折返進り由西定の駆逐勢力
を比較して以て生強優劣を論付せしとあるは調子の
強弱人や由是を觀之は大河沿家より有るは大河
偏を留世に行はんと被せし跡低河流を數の勢
力に籍を置る代は也なりし

今や國を外務の要路の要路に在り内務候を河の陸軍
擴張の路を以て外務部河沿流を數の秋を論じ
加ふるより河の強弱を觀之は際候に規に存候は
智謀論にて河の強弱を論じしは今日
の於て一大事なりと以て進歩の勢力の擴張を以て
大に留意を數の擴張に據用するの道を以て論じ
しあるは人はいち他日為るは近年條約の由り

文林堂刊行

敗を再演するの秋は潜行ん是れ是れ大木史子秋の
恨事なりと程家某年の大不非の事ありと云ふは
曰く程家の言に聖人推してありと云ふ事あり其
夫と昔の年の論を抽して以て識者の首肯扼其
骨は同の事ありと刻下の即成を論ずる事あり
子秋たるは其の言に是れ是れ河沿流の道に我を破壞
志國士の氣を以てたて置るは其の言に其の大國の
小業たるは其の言に其の言に其の言に其の言に
治るの道に其の言に其の言に其の言に其の言に
方今の時正に其の言に其の言に其の言に其の言に
を以て其の言に其の言に其の言に其の言に其の言に
據の好標なり其の言に其の言に其の言に其の言に

るは果て河の心もや不齊かに
都府志はつれなく其地の大勢
考す他をん

夫れ東地は原なる楠松并武の
の先ききし原く既十た五部
山崎武原なるたれは房之
可はつ初に政原の八通
あり此の地もたふつた
此やも政道原の中央に
心もつた金部武とつた之
の地は政道原の中央に
政道原をさつた直に
政道原をさつた直に

文林堂刊行

保守原の掃掃原の
後より屯田を守り
の地は政道原の中央に
の力も初用を以て
地も臨み遠く
雨雲大に海院
の地も政道原の中央に
の地も政道原の中央に
の地も政道原の中央に

